

令和3年度第2回豊田市図書館協議会 議事録

日時：令和3年12月16日（木）午後1時55分～午後3時25分

場所：豊田中央図書館6階多目的ホール

出席者：委員 9名

事務局 4名（図書館管理課）

関係課 5名（学校教育課、保育課、子ども家庭課、
次世代育成課、市民活躍支援課）

指定管理者 2名（TRC・ホームックス共同企業体）

（1）豊田中央図書館からの報告

指定管理者：「豊田中央図書館からの報告」について説明

委員：コロナ禍でも利用状況が戻っているのは良かった。

（2）「豊田市子ども読書活動アクションプラン 2022～2025」について

①現アクションプラン 2018～2021 の報告

事務局：「現アクションプラン 2018～2021 の報告」について説明

関係課：「現アクションプラン 2018～2021 の報告」について説明

委員：学校間の相互貸借について、学校図書館司書が（図書システムの）掲示板を使って情報交換を行っているというところがあるが、具体的にどういう情報交換があるのか。これによって、相互貸借が活性化されているのか。

学校教育課：掲示板は教員同士の情報交換のためのものだが、司書は資料を探して貸し借りをを行うといった情報交換ができる。

委員：資料のニーズを呼び掛けるといった形の利用が、今は標準的ということか。

学校教育課：司書は学校で掲示板を確認し、反応する人は反応していると思う。

委員：もっと活用すれば、活性化できる部分があると考えて良いか。

学校教育課：司書は校務システムの情報を見られないので、一昨年度から導入した図書システムを用いて必要な情報をやり取りしている。

委員：今後の事業報告は、継続した部分と拡充した部分を区別して報告してほしい。定着や広がりが見えるように、意識してデータを採ってほしい。

委員：各施設で事業を行っているが、公平になっているか。どこでも同じように情報を受けることができるか。確認をして地域ごとに偏りがある場合、是正していくことを今後の課題にしてほしい。

委員：障がいのある子ども達のための図書資料の充実と団体貸出の充実については、重なっている部分があると思う。障がい福祉課のサービスで、放課後児童デイというものがある。障がいを持つ子どもを預かる活動がたくさんあるので、そういった所へのアプローチは今まであったのか。

事務局：放課後児童デイとの連携は、まだできていない。

委員：障がい福祉課が把握しているので、連携してほしい。

②「豊田市子ども読書活動アクションプラン 2022～2025」の検討

事務局：「アクションプランの策定にあたって」について説明

委員：学校現場においては、良いと思うことはやりたいが多忙化解消の流れもありできない部分がある。プランではやるべきことが増えているようだが、職員を増やすのか。

事務局：次のアクションプランは、すべき事業は引き継ぎ、必要ない事業はしない方向で精査していく。現状案でも、事業の数は現状より減っている。

委員：新しい事業で定着してくると、業務的には楽になると思う。そういう目線でも事業を精査していくと良い。

事務局：「アクションプランの基本的な考え方」について説明

委員：前回までの課題を踏まえて事業を整理するのは、効率的であり業務量の問題についても対応ができるので良い。「アクションプランのモニタリング」について、指針4に盛り込んでいるが本来は指針として立て総合的に見ていくほうが望ましい内容。まだ体制ができておらず指標もないため、今回は指針4が良いが、最低でも次回は指針に反映したほうが良い。

事務局：現時点で実施しているアンケートでは、市がやっている事業の成果・評価がわからない。今後はどのように進めていくか検討・評価する場を作っていく。結果はまた協議会で報告していく。

委員：事業の推進とその検証は、それぞれの事業で異なる。一つの方法とも限らないので、協議会も含めた協力でアクションプランを考えていく。

委員：前回と比べて、ポイントが分かりやすくなっていて良い。市民から見ても、何が関係あるか考えやすい内容になっている。

委員：園向けの資料の新規作成について、具体的のどのようなものか。

事務局：現在も園向けの資料を配布している（おすすり本や、読書カードなど）。既存の資料を更新するかたちで、年長の子どもが小学校に上がる際にスムーズに図書館をえるような資料にしていく。

委員：色々な取組を行っているが、一部の園から中央図書館は遠い。交流館でも資料が貰えるなど近くで活用できるようにしてほしい。

委員：例えば自分は小・中学校のことは分かってても、乳幼児や園、高校ではどのような事業が行われているかはあまり目にすることが無い。ほかの世代への支援を情報共有してもらえれば、それを下地にした対応ができ、関係者が繋がる。また、学校関係だけでなく本屋にも情報共有できると、家庭に本が届くのではないか。

委員：大学生や高校生の活動がみんなの所に届いていないのは勿体ない。教員の手元に情報が入ってくるようにしてほしい。

事務局：ターゲットに情報を届けるのは難しい。やりがい次繋がる、他の市民にも伝わっていく情報提供を考えていかなければならない。例えば中央館はSNSを上手に使って情報発信しているが、そのSNSを見る裾野を広げる方法を探していかななくてはならない。

指定管理者：ボランティアを紹介する場としては、図書館だよりもある。その他表に出てこない形で協力していただいているボランティアを紹介する場を設け、図書館に関わりたいという人を増やせたらいい。

委員：アクセスしてこない層に情報を届けるのは課題である。協議会での人脈を使って、うまく動かして行ってほしい。

委員：産業に係る立場からはコメントがし難い話題である。前回の協議会でも行ったが、繋がり形成という観点からするとPRを上手くやってほしい。チラシを配るではなく、商工会議所からメールでURLを展開するといった方法がある。

事務局：前回から進捗がなく反省している。商工会議所を巻き込んで、PRをしていきたい。

委員：大人が本を楽しんでいる姿を見せれば、子どももそういう風にして良いんだと感じる。色々な形で大人が参加する図書館になって行ってほ

しい。

委員：岡崎市の広報では、図書館の大々的な特集をしていた。豊田市でも何年かに1回は特集にすることができれば、市民の目に届くのではないか。

委員：調べ学習が盛んであることは良い。子どもが受け身ではなく自ら調べたいと思うような活動かは、学校現場の時間の作り方次第でもあると思う。子どもの達成感や意欲に繋がるよう、もっと活動を広げていきたい。

事務局：学習指導要領も変わり、様々な教科でも調べてまとめることが授業で取り扱われている。図書館の取組は、すでに行われている授業の晴れの舞台として活用してほしいと考えている。

委員：図書館だよりは交流館にも置いてあるか。

指定管理者：置いてある。

委員：交流館では、縦型のラックに置かれて目立たない。平置きになるようにできないか。

市民活躍支援課：たくさんのチラシの配架依頼がある中で、交流館スタッフがどのチラシを目立つように置くか選別が難しい。どうしても目立たせたい事情がある場合は、所管課から市民活躍支援課に相談したうえで、各交流館に説明していくことは可能である。今後検討する。

委員：読書相談の充実という点で、図書館に無い本は図書館の受付の人はどこにあるか紹介しているのか。

指定管理者：リクエストで本が届くのを待てない場合は、ある図書館を紹介している。

委員：図書館を紹介されなかったという話を聞いたことがある。各交流館でも必ずそのように対応してもらいたい。

委員：子どもは学校のタブレットを活用しているのか。持ち歩く形ではないだろうか。

委員：1月から導入している。現在は、なるべく家に持ち帰る運用をしているが、ルールではなく各校判断。家では宿題で使うなどの利用法。教育センターの方で時間を管理しており、さらに各校で独自の時間制限を敷いているところもある。調べ学習に関しては、タブレットをよく使っている様子である。

委員：豊田市全体としてタブレットの使い方の全体像を定めつつ、図書館ではどのように使うか調整をしていく必要があるのではないかと。

委員：教員自身がタブレットを使った調べ学習を子どもに教えることに苦戦しているように思う。先生が、調べ学習ができるよう、図書館が主体となった研修などの機会はあるのだろうか。

委員：高校では、タブレットを使っていない。

委員：小学校の現場では、教員個人の能力による。現場としても問題だと考えているので、講師を招いて研修をしたり、教育センターでの研修に行ったりしている。しかし、研修内容を使いこなせるかは、教員次第。図書館でそういう機会があれば、出たいという気持ちはある。だが、すでに多忙な教員にそういう機会は中々設けられていない。画期的にタブレットを使用する能力は伸びないが、利用はしている。

学校教育課：教員の力量については問題視している。現在は導入1年目ということもあり、教員・学校格差が無いよう教育センターでも研修を開催している。学校の中でOJTを進めてもらう。現在は、教員にはあくまでも授業で使うことを重点的に研修している。調べ学習については、次の段階の問題だと考えている。子ども達が簡易に検索できるようになったことで、情報管理やリテラシーの力も併せて付けていかなければならない。図書館が主体となった調べ学習の研修については、働き方改革の問題もあるので、校務システムを利用した動画あたりが考えられる。

委員：現在、本の紹介動画を募集していると思う。どの課の事業も共通することはきっかけづくりが多いように思うが、動画は特に良い媒体ではないかと感じる。紹介動画の入賞作を外に出してはどうか。もっと人に見てもらえるだろうし、身近な立場の人から紹介された本を読んでもらえ、市民を巻き込めるのではないかと。

事務局：「ビブリオ動画」は、コロナのため「ビブリオトーク」から切り替えた事業であるが、子ども同士の身近な人の紹介した本は読みたくなるし、喋り方もうまくなったと好評である。良い事業をもっと利用されるように伝えていく。